

■ On-Air 3000 / On-Air 2000M2 / On-Air 1000 ユーザーレポート

信越放送株式会社 様

On-Air 3000 / On-Air 2000M2 / On-Air 1000

新本社に移転、ラジオ・スタジオを STUDER で更新



■ Gスタジオ・サブ

信越放送株式会社
技術局 放送管理部部長
戸谷 正彦



新本社に移転

2006年8月、長野市の中心市街地、問御所町に本社を移転しました。新本社は地下1階地上10階建てで、4階のラジオフロアにマスター以外のラジオの機能を集約。3つのスタジオと編集室、営業、編成制作のオフィス、CD室などがあり、また6階の報道フロアにもラジオニュース用にスタジオ（ブース）を設けました。この移転を機に音声卓を更新。スタジオ数は新本社では旧本社より2つ減らし4つにしました。マスターの入出力や回線などがデジタルであること、またデジタルミキサーがもっていた不安感が解消され信頼性が増してきたことから、当初からデジタルミキサーを前提に検討しました。結果的に音声卓1台を移設したAスタジオ以外は、スチューダー

製の音声卓、On-Air 3000、On-Air 2000M2を2台、On-Air 1000の計4台を採用することになりました。

Gスタジオ

Gスタジオは、音楽情報番組からワイド番組、特番など生放送の番組をほとんど送り出しているSBCラジオのメインのスタジオです。この音声卓は特に高機能、高信頼性、操作がシンプル、省スペース、静穏性などが要求されます。もちろんコストも選定には重要な要素なの言うまでもありません。数社で比較検討しましたが、これらの条件を全てクリアしたのが On-Air 3000 でした。また、ラジオのサブとはいえ視覚的にもアピールしたいという希望がありました。On-Air



■ Bスタジオ



■ Cスタジオ



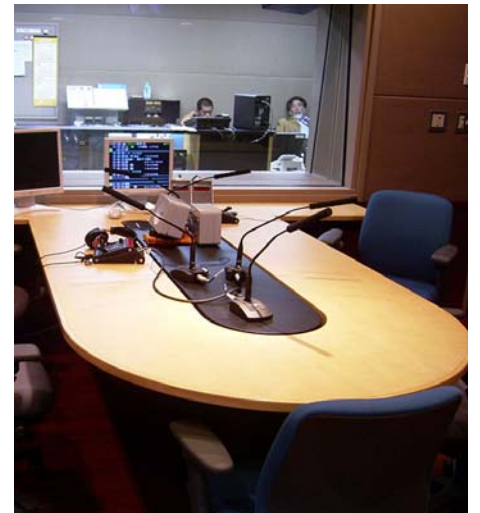
■ 編集室



■ Gスタジオからの初放送



■ Gサブ・デスクと一体のラック



■ Gスタジオ・二重構造のアナテーブル

3000は卓のレイアウトデザインが自由にできる他、弊社ではつまみがたくさん並ぶEQやボタン類は表に出しておく必要がないため、その分、見た目をシンプルにすることができ、そういった面でもとても「ラジ的な卓」といえます。一見して操作しやすそうで親しみが湧いてくる、そんなサブを作りたいという要望にOn-Air 3000は見事に応えてくれました。

Bスタジオ、Cスタジオ、編集室の機種選定Gスタジオ以外の卓は、技術者よりも制作やアナウンサーが主に使います。そのため、操作が簡単で使いやすいのが一番の条件で、6フェーダーぐらいのデジタルミキサーにSTUDER以外のいい製品が見つからなかったというのが正直なところ

です。Bスタジオは、簡単な生放送を1人で操作できるワンマン卓という要素と、CMやコメント録りができる、所謂録音スタジオという、両方の機能を兼ね備えたものになりました。スタジオの効率的な運用をはかるためです。BとCスタジオ（ニューススタジオ）にはOn-Air 2000M2を、Bスタジオのサブとしても機能する編集室にはOn-Air 1000を導入しました。両ミキサーとも同じ感覚で操作でき、フェーダー数数の倍の入力を扱えるのが魅力です。

運用開始

2006年8月28日から新本社で新しいマスターと同時に運用を開始しました。技術以外の人の訓

練時間が短かったので心配しましたが、思いのほかスムーズに運用に入ってくれたと感じています。開始から数日後の9月1日にはFM局2局と共同制作でGスタジオをメインに防災特番を放送しました。担当した技術からは「使いやすい」という評価でしたので、導入を決めた責任者としては一安心といったところでしょうか。他の人にも卓の様子を聞くと「アナログコンソールに近く操作性がよい」「タッチパネルを使った斬新なアイデア」などという感想が返って来ました。1ヶ月半経ちますが、これまで卓のトラブルはなく順調に運用できています。今後は故障なく長い期間安定して使用できることが一番ですが、タッチパネル等のデジタル特有の保守をどのようにしていくのが課題です。